

[生徒指導]

生徒一人一人の心を育てるピア・サポート活動の実践

ーピース・メソッドの手法を用いたピア・サポート・プログラムの自校化をととしてー

関矢 睦子*

1 はじめに

(1) 問題の所在

平成9年、教育課程審議会答申の「教育課程の基準の改善の基本方針について（中間まとめ）」において、「学校は子どもたちが伸び伸びと過ごせる楽しい場でなければならない。分かりやすい授業が展開され、分からないことが自然に分からないと言え、試行錯誤することが当然のこととして受け入れられる学校でなければならない。そのための基盤として、子どもたちの好ましい人間関係や子どもたちと教師との信頼関係が確立し、学級の雰囲気も温かく、子どもたちが安心して、自分の力を発揮できる場でなければならない」とまとめられている。

つまり、個々の生徒が存在感をもって学校生活を過ごせてこそ、楽しい学校生活を送るということであり、充実した教育活動が推進されることになる。そして、そのためには、生徒同士の人間関係及び生徒と教師との信頼関係がうまく機能していることが、学校生活の基盤であると考えた。では、上記の事柄を当校の実態と比較したとき、個々の生徒にとって、学校が居心地の良い空間になっているだろうか、生徒同士の人間関係はうまくいっているだろうか。

平成14年に赴任し、11月の教育相談期間に全校生徒を対象に調査したところ、「学校が過ごしやすい」と回答した生徒が62%、「相談できる友達がいる」と回答した生徒が68%であった。自由記述の設問では、「グループが固定化していて仲間に入りづらい」「グループ化が気になる」等の固定化した人間関係に関する記述が多く記載されていた。

この結果から、生徒数120人の小規模校である当校では、生徒間の人間関係が少人数のグループで固定化しており、これが原因で、人間関係の悪化が見られ、学校が居心地のよい空間として機能していない様子が伺えた。

この事柄を裏付けるようにこの年、2年生女子の間で特定の生徒に対して、言葉による嫌がらせが続き、その改善のために学級会の開催や職員間の会議を何回も設け、いじめの沈静化に努めた。しかし、双方共、自分は悪くないという気持ちを変えず、相手の気持ちを理解し許容することが出来ず、嫌がらせが繰り返された。このトラブルの背景には、保育園児の頃から培われた人間関係が中学生になった現在も続き、固定化していること、また、中学生になると思春期を迎え、心の葛藤をうまく自分自身で処理できず、その苛立ちの矛先が友だちに向いてしまうことが、考えられた。

以上の事柄をふまえ、様々な個性を持つ生徒一人一人が主体的に体験的な活動をととして、自分に自信をつけることができれば、他者も受容でき、お互いを支え合える人間関係作りの取組が、当校でも実現できるのではないかと考えた。また、人間関係作りを進めていくことが、当校の特色ある学校づくりにも繋がるのではないかと考え手立てを模索し始めた。

(2) ピア・サポート活動の導入

ピア・サポートについて、森川（2003）は、ピアは英語で「年齢を同じくする仲間」、サポートは「支援」を意味し、子どもたち同士の人間関係を育成する活動をととして、人の役に立ちたいという子どもの潜在的な感情を利用し、心配や不安を抱えている仲間に対して支援方法を学び実践することで、仲間の心を癒す活動である。同時に、支援したサポーターも思いやりや支え合いの心を豊かにし、周囲の人に対して良い影響を与える活動であると説明している。

また、滝（2004）は、子どもたちの課題や学校教育の実態を正しくふまえ、予防教育の明確な視点に立ち、教育課程に位置付けて取り組む生徒指導の取組が必要であると訴え、「予防教育的な生徒指導プログラム」の研究実践を重ね、「ピア・サポート・プログラム」を開発した。このプログラムは各学校で全教職員の共通理解があれば、無理な

* 柏崎市立第五中学校

く安全に負担なく実施できる取組である。なお、このプログラムをP「準備」E「教育」A「行動」C「対処」E「評価」の5段階の過程でフィードバックさせながら取り組んでいくことで、個々の生徒の心が育っていく。この予防教育上の視点に立った取組が、県教委が進めているピース・メソッドである。

以上の事柄を受け、当校の固定化した人間関係を改善する手立ての一つとして、ピア・サポート活動の導入を考えた。

2 研究の目的

全校体制でピア・サポート活動を推進する過程で、活動の主旨を理解し肯定的に受け止め取り組む生徒が増えるならば、友達（他者）を気遣い行動できるようになり、学級の雰囲気が改善し学級が楽しいと答える生徒が増える。学級の雰囲気が改善すれば、学校の雰囲気の向上にも繋がり、学校も過ごしやすくなる。一連のピア・サポート活動の取組はピース・メソッド（PEACE）の手法で、「ピア・サポート・プログラム」を自校化し実施することとする。

なお、以上の取組は、ピア・サポート活動に肯定的な生徒の有無を調べることで、本研究が検証できると考えた。

また、ピア・サポート活動を自校化するには、教職員の協力体制が不可欠であるため研究を以下の順で展開する。

- ① 教職員へのアプローチ
- ② 生徒へのアプローチ

3 研究実践のためにピア・サポート・プログラムの立ち上げ

(1) ピア・サポート・プログラムとは、

「ピア・サポート・プログラム」は、子どもの関わり合いをとおして、子ども自らの心が成長することができる「学校づくり」を目指す取組であり、学校全体で取り組む活動である。図1で、滝（2002）は基本的な形式を示している。

図1を当校のピア・サポート活動で説明すると、領域1で対人関係の気づきや社会的なスキル等の体験的なトレーニングを積み重ね、自分を許容し、他者との関わり方を学びコミュニケーションスキルを身につけることを繰り返す。同時に、領域2の様々な実践的な行事で、成功や失敗の経験を繰り返し自分に自信が持てるようになり、他者も受容できる人間になると考えた。そして、領域1と2の活動を繰り返すことで個々の生徒が思いやりのある人間に成長し、学校全体の雰囲気の向上に繋がると考えた。これを、ピース・メソッド（PEACE）の手法に照らすと、Preparation（準備）とEducation（教育）が領域1に、Action（行動）とCoping（対処）、Evaluation（評価）が領域2に当てはまる。

しかし、図1のプログラムは、サポーターを一部の生徒に限定しており、全校生徒をサポーターとしたものではない。

当校のピア・サポート活動は、全員の生徒をサポーターとして考えた活動であり、図1を基本形として、活動が経過する過程で、全校生徒がサポーターの当校独自のピア・サポート・プログラムを作り上げていきたいと考えた。

なお、ピア・サポートでは、個々の生徒が自己実現することを「自己有用感」と言う。理由を滝（2004）は、他者の存在や関わり、他者からの評価を前提とした感情であり、自分勝手な感情を現す活動ではないと説明している。

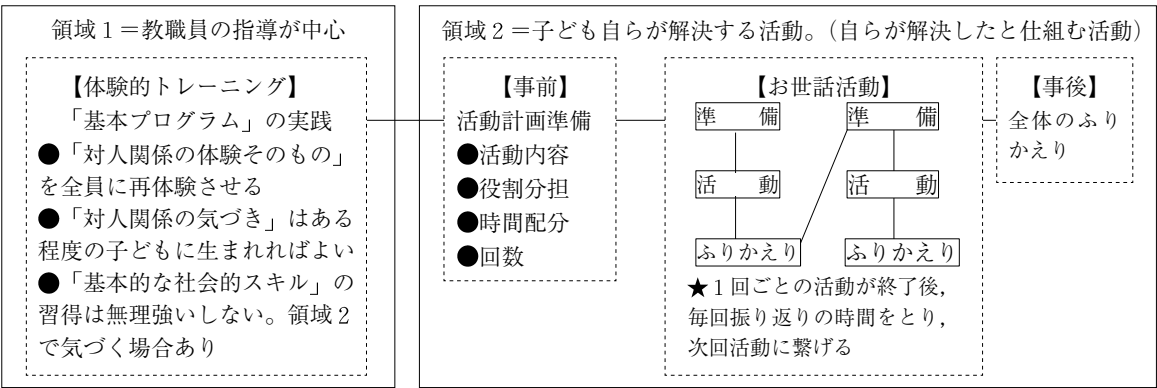


図1 「ピア・サポート・プログラム」の基本的な形式（「領域1」と「領域2」のながれ） 滝（2002）

(2) ピア・サポート活動を実現するために

① 教職員へのアプローチ

ピア・サポート・プログラムを展開するには、全教職員の共通理解と協力が不可欠である。このため、平成15年度スタートまでの6ヶ月間、職員会議等で事あるごとに、意義や実施の際の注意事項等を伝え理解を求めた。その結果、新年度の校務分掌にピア・サポート推進委員会を設置し、教育計画にもピア・サポートが盛り込まれ現在に至る。

② 生徒へのアプローチ

生徒が自らピア・サポートの必要性を理解し活動を始めた意識するよう努めた。また、ピア・サポートは特別な活動ではなく、生徒全員がサポーターを目指す取組であり、この活動をとおして居心地のよい学校にしようと伝えた。生徒に活動を広げるために留意したことは以下のとおりである。

ア 機会を逃さず、場を捉えた働きかけ……上記の女子のトラブルを逆に立ち上げのチャンスと捉え、利用する。

イ 生徒会の組織（委員会と同列）『ピア・サポート』の立ち上げ…学級代表2人の合計6人が、中心に活動。

③ 関係機関との連携

私たち教師は、市立教育センタースタッフに助言を求めながら活動を立ち上げた。

生徒も教職員も全員が教育センターに出かけ、臨床心理士から領域1のトレーニングを夏休みに受けている。生徒はこのピア・サポーター養成講座を受講することで、サポーターとしての姿勢や使命感を強く持つようになった。

4 研究実践の内容

1年次（H15年度）、2年次（H16年度）、3年次（H17年度）の三年間で、当校の実態（生徒数、生徒の気質、教員の協力体制、保護者の理解度、専門機関との連携等）を考慮し生徒全員をサポーターとしたピア・サポート・プログラムの骨格を作り実践した。4年次の18年度は活動内容の精選に目を向け、独自のプログラム（図2）を完成させた。

（1）1年次（H15年度）のピア・サポート・プログラム

当校のピア・サポート活動は、全校生徒をサポーターにしたいと考えている。しかし、全校生徒が、プログラムを理解するには時期尚早と考え、ピア・サポートの考え方が定着するまでの間、サポーターを募集または推薦する形にした。

その際のサポーターの条件は、「困っている人を助けたい人」「人の役に立ちたいと考えている人」「人の話を聞こうとする人」「信頼を裏切らない人」「秘密を守る人」を理想として、将来的にそうなりたいと願う人、または、自分自身の心の成長を望んでいる人を募った。その結果、全校生徒110人中38人がサポーターとして誕生した。

領域1の体験的トレーニングの進め方について、教育センター臨床心理士に相談したところ、センターで養成講座を受講する運びとなる。（図2 領域1のピア・サポーター養成講座）

（2）2年次（H16年度）のピア・サポート・プログラム

領域2のお世話活動で、サポーター生徒から、「気兼ねなく相談できる空間がほしい」「日々の活動を実践するために当番を決めた方がよい」の声があり、昼休みの当番活動とサポート室の設置を実現した。（図2 領域2、昼休みの当番）

図2 領域1の体験的トレーニングについて、「ピア・サポーター養成講座は有意義であり、毎年全員参加すべき」「養成講座の前にサポーターの心得を講義してほしい」「傾聴訓練は相談者に自分の考えを押し付けてしまったことを反省する機会になった」の声があった。学校評価で、「ピア・サポートはよい活動か」の問に91%が肯定的な活動と答えた。

サポーターの任期について、サポーター生徒で何度か検討し、「ピア・サポートは他人の思いに気づくことが基本。全生徒がピア・サポート精神を身につけてほしい。このため、原則として、サポーターは途中で止めない」と決めた。

また、ピア・サポートは生徒の総意を大切にす意図から全内容の事前、実践、事後について、担当とサポーターリーダー会（学級リーダー）で検討し、サポーター全員に内容を伝え活動を推進した。各会は生徒の司会進行で進められた。

結成式及び研修会終了後の反省会の折、リーダーから「学校全体で取り組んでも学級が悪ければだめだ」の発言があり、検討した結果、途中に反省する機会を設け、ピア・サポート学級会を6月と11月に設定した。（図2 領域2）

（3）3年次（H17年度）のピア・サポート・プログラム

2年次の活動が生徒に好意的に受容され、3年次は全校生徒99人中73人、74%の生徒がサポーターになった。

ほぼ全員の生徒がサポーターになったが、活動が生徒間に十分浸透せず時期尚早であったため、逆にサポーターとして意識が薄く他者のことを気遣うことができない生徒が目立ち、ピア・サポート活動の推進を妨げる結果となった。

（4）4年次（H18年度）のピア・サポート・プログラム

ピア・サポート・プログラムの推進に当り一番の課題であった「生徒全員がサポーター」は、4年目で実現した。

学校評価項目にピア・サポートを設定したのは、軌道にのった16年以降である。しかし、全校体制は18年からである。そのため、全校生徒の74%の生徒がサポーターになった17年と18年を比較した。

図3で、「ピア・サポートはよい活動だ」と、ピア・サポートに肯定的に答えた生徒は、「思う」「大体思う」を入れると、17年78%、18年88%の推移である。理由の記述として、「研修で学んだことを生かし、学校生活を楽しくするように努めている」「サポーターとしての誇りをもって過ごしている」「周りの友達の様子に注意できるようになった」「自分が優しくなれた感じ」「友達と話するとき、言葉に気をつけるようになった」とあった。

逆に、「あまり思わない」「全く思わない」と答えた者は、17年16%、18年8%である。理由の記述として、「サポーターの自覚のない人がある」「サポーターなのに人が嫌がることを言う人がある」であった。

「分からない」と答えた者は4～6%の間を推移し、理由の記述では、やはりサポーターの自覚不足が挙げられていた。

生徒がピア・サポートを肯定的に受け止め推進することで、学校の雰囲気が改善することに繋がったかを知るために「過ごしやすい学校になっているか」の設問を加えた。図4で、「思う」「大体思う」と答えた生徒は、17年73%、18年83%である。理由の記述で「ピア・サポートの活動が生きている」と答えた者が多かった。

逆に、「あまり思わない」「全く思わない」と答えた者は、17年22%、18年14%である。理由は、「ピア・サポーター活動が生かされていない」「サポーターなのに嫌なことを言う人がある」と記述していた。

図3と図4から、ピア・サポートの浸透の度合いがそのまま過ごしやすい学校になって表れていることが伺える。

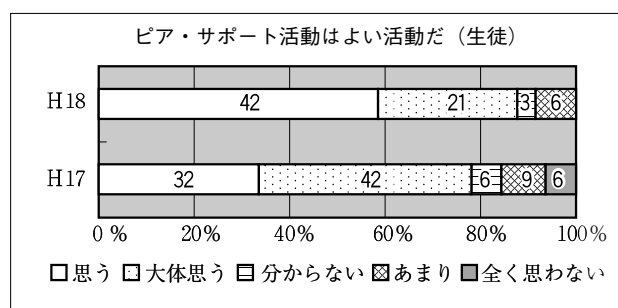


図3 生徒対象の学校評価（ピア・サポート）

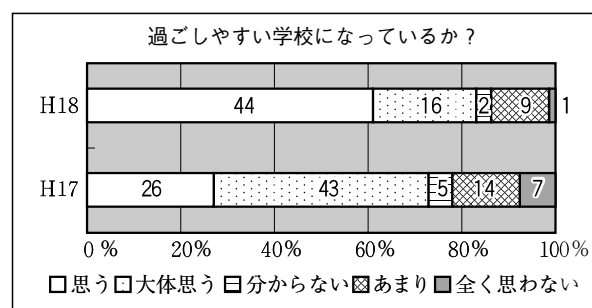


図4 生徒対象の学校評価（学校生活）

6 考察・成果と課題

全校体制でピア・サポート活動を推進する過程で、活動の主旨を理解し肯定的に受け止め取り組む生徒が増えるならば、友達（他者）を気遣い行動できるようになり、学級や学校の雰囲気の向上にも繋がり、引いては過ごしやすい学校生活を送ることになるであろうことを活動に肯定的な生徒の有無や記述等から検証し、本研究の成果と課題を考察する。

(1) 教職員の変容

ピア・サポートの自校化は、教職員の協力体制が不可欠である。それにはまず、生徒の変容を目の当たりにすることが一番と考え、学級会や集会、生徒会主催行事にスーパーバイザーとして加わり、研修会に生徒と共に参加することで教職員と生徒が共有する時間を多く持つことに努めた。その結果、教職員全員がピア・サポートに肯定的になった。

今年で4年目の活動となったが、ピア・サポートが当校の特色ある活動、伝統と位置付けられ、全教職員共通理解のもと、積極的に活動が推進され、校務分掌にも記載されるようになった。

最近では、担当が逆にアドバイスを受けるようになった。例えば、研究主任から「総合的な学習の時間で今年から始めたキャリア教育の職場体験では人間関係作りが大きく比重を占める。是非、ピア・サポートと関連付けたい」の話があり、以後キャリア教育の実践でも相談されるなど、様々な機会がピア・サポートの実践が生かされるようになった。

今後の課題は、時と場所を適切に捉え、誉め励ますこと、指示はしないで生徒自らが気づいて改善したと考えるような支援を多く実践していくことと考える。

(2) 生徒の変容

ピア・サポート活動を開始した15年は、サポーターが全校生徒の35%、16年は53%と、多くてもサポーター数が、全校生徒の半数ほどであった。当然、自ら意欲的にサポーターになった生徒が大半であり、サポーターとしての自覚もある意識の高い生徒ばかりであった。その結果、生徒同士もよい活動とピア・サポートを認め、16年度の学校評価

では86%の生徒が「学校が過ごしやすい」と答えた。

17年度になり、ピア・サポートが生徒間に根ざす活動として定着し始め、全校生徒の74%がサポーターになった。

全校生徒が気軽にサポーターに加わり活動を展開し始めた結果、逆に、ピア・サポートをよい活動だと答えた者が78%に、過ごしやすい学校と答えた者が74%の数値にと、前年度より12%数値が低くなった。これは、当初意識の高いサポーターが中心となり、学級や学校生活の改善に努めていたときは、当然ピア・サポートの取組も成果をあげられたが、大勢の生徒が取り組むようになり、サポーター間で活動に対する意識の差が生まれ、その結果、学級や学校生活の雰囲気が崩れ、ピア・サポート活動の数値が低くなったと考える。

しかし、一部のサポーターのみの取組では、学級や学校生活の根本的な改善には繋がらない。全校生徒がサポーターになる必要があると考え、図2の「当校独自のピア・サポート・プログラム」を考案した。

このプログラムの特色は、意識の低いサポーターに月2回放課後を中心に個別相談や指導、ソーシャルスキルを継続して行っていること、また、年3回の臨床心理士による研修のうち、最初の研修にサポーターとしての資質や姿勢の伝達を依頼している。また、学期末ごとにサポーター自身に自己評価表の記入を導入した。

以上のような個々のサポーターの意識を高めることが、学校全体の雰囲気の向上にも繋がり、全校生徒がサポーターになったにもかかわらず、18年は17年より10%、ピア・サポート活動と過ごしやすい学校の数値が高率となり、臨床心理士から「サポーター生徒は、友達の様子を気にかけて言葉をかける姿勢がほぼ全員出来ている。素晴らしい」と、褒めていただけるほどに意識が高まった。まさに、領域1の「対人関係の体験的なプログラム」を全員が体験し、「対人関係の気づき」をほぼ全サポーターが習得できたことになる。

図5で、ピア・サポート活動を生徒一人一人の自己実現のプロセスで説明すると、領域1をPE、領域2をACEサイクルで進め、その都度領域1と2の間をフィードバックさせながら反省評価し、次の活動へと展開していく。この一連のプロセスの中で、生徒はコミュニケーション能力を高め、他者を気遣い行動に表せるようになり、自らも自信を付けていく。

心の変容とまでは言い切れないが、少しずつ友達（他者）を思いやる人間関係が学校生活の中でも多く見られるようになった。一緒にいる友達とけんかして一人になって困っている友達を自分たちと過ごすようにと支えている場面や休み時間に勉強を教え合っている場面、校内意見文発表会でピア・サポートの意見文を発表した者、不登校傾向の生徒に積極的に関わり自分に何ができるかを自然に考え行動する者等の活動が日常的に見られる。

今後の課題は、心の育ちの差に対して、全校生徒で受けるトレーニング以外に、該当生徒に差を埋めるための個別相談や指導を教職員全員で継続的に行い、どの生徒にも他者を気遣う言動を積み重ね均等に身に付けさせることである。

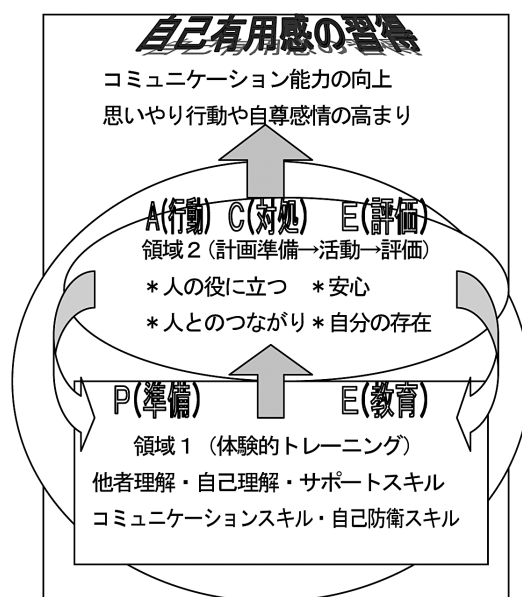


図5 生徒一人一人の自己実現のプロセス

7 おわりに

私たち教職員はピア・サポート活動をとおして、生徒の「皆に認められたい」「愛されたい」「所属したい」という欲求を満たし自己実現するようにプログラムを組んでいるのである。学校の実態を見極め、全教職員の共通理解に基づき、学校ごとで自校化した取組を推進していくことが重要である。常に学校の中心は生徒であり、支えは教師である。

人格形成に一番大切な思春期を見守る者として、これからも、生徒の心への支援を展開していきたい。

〈引用・参考文献〉

- 滝 充 「ピア・サポートではじめる学校づくり、実践導入編」 金子書房、2002年、10～24pp、82～108pp
 滝 充 「ピア・サポートではじめる学校づくり、中学校編」 金子書房、2004年、
 新潟県教育委員会 「いじめ防止学習プログラム前・後編」、2000年
 森川 澄男 「学校でのピア・サポート入門」『月刊、学校教育相談』 ほんの森出版、2003年3月号、4～5pp